# 浦賀文化

平成28年（2016年）7月1日

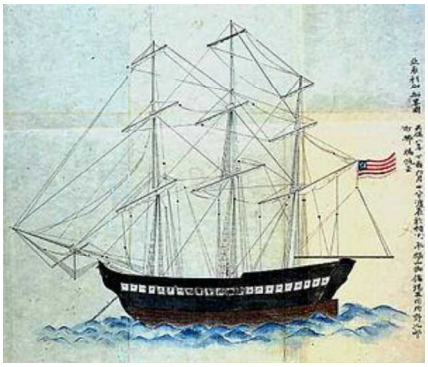
第46号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp


## モリソン号事件

**異国船打払令（一八二五年）が発令されてから目立った異国船の来航はなかった。そうした中、日本人漂流民の送還を名目に通商を求めて姿を現したモリソン号。これが浦賀における最初で最後の異国船砲撃事件であった。**

幕末におけるアメリカ商船「モリソン号」による日本人漂流民の救助にまつわる「鎖国政策とヒューマニズム」をテーマにした三浦綾子の歴史小説『海嶺』の一部をご紹介します。



モリソン号（国立公文書館所蔵）

◇　◇　◇

やがてモリソン号は、浦賀に二マイル程の地点まで、船を進めた。と突如、間近な台地から砲声がとどろいた。砲弾が唸りを立てて、陸地と船の真ん中に落ちた。船長が言った。

「航行を停止せよと言うことですよ」

船はおもむろに風下に向きを変え、陸地から一マイル離れた海に碇をおろした。この場所は野比の海岸に近かった。時は午後三時頃である。大砲は尚も次々と撃ち出された。砲台が平根山の白壁のがっしりとした建物に据えられているのがよく見えた。この平根山の対岸からも砲弾は飛ぶ。が、湾の広さは五、六マイルもあって、モリソン号は静かに砲弾の及ばぬ地点に待避した。まもなく砲撃は止んだ。（中略）

低い平根山から砲身が間断なく火を噴く。鼓膜が破るような大きな音だ。モリソン号は、遂に帆を張って、浦賀の湾を離れた。そのモリソン号を追って大砲を備えた軍船が数隻尚も攻撃して来た。三、四十の武士たちがそれぞれに乗り組んでいる。

「畜生！追いかけてまで撃つとか」

庄蔵が歯ぎしりをした。船足の早いモリソン号と軍船の間が見る見る隔たった。（中略）

故国を目の前にしながら、一歩も上陸できないとは……。さすがのキングのまなざしも怒っていた。

次第に浦賀の港が遠くなって行く。この時、平根山の砲台や、軍船では、遠ざかるモリソン号を見送りながら凱歌を上げていたことを、キングたちは知る筈もなかった。

◇　◇　◇

ここで、モリソン号事件の背景についてたどってみましょう。

幕末の天保三年（一八三二年）、鳥羽を経て江戸に向かう千石船（江戸時代に物資を輸送するのに使われた大型の木造帆船）が遠州（静岡県）沖で暴風に遭い、難破、遭難してしまいます。歴史小説『海嶺』には、一年以上もの間漂流した末に、北アメリカに漂着した音吉・岩吉・久吉という三人の日本人の数奇な運命が描かれています。

彼らは、漂着したアメリカ太平洋岸のワシントン州オリンピック半島で先住民に救助されたものの、先住民の奴隷となってしまいました。しかし、金品と交換にイギリス商社へ売り飛ばされ、大西洋、インド洋を渡りマカオへ送られていきます。その途中に立ち寄ったロンドンで十日間の滞留期間中、現地見学をした彼らはイギリスに上陸した最初の日本人とされています。その後、一八三五年にマカオに到着してからは、ドイツ人宣教師に協力して世界初の日本語版とされる聖書を完成させたといいます。

一八三七年、マカオでの滞留を終えた音吉らは、薩摩の漂流民四人とともにイギリス船で那覇（当時は琉球国）に到着します。ここからアメリカ商船モリソン号に乗り換えて帰国の途に就きます。しかし、江戸も近い浦賀に入港しようとしたところ、浦賀奉行が管轄する平根山台場から砲撃を受けてしまいます。その結果、モリソン号は浦賀港に入ることができず、野比方面に引き返して行ったところ、ここでも砲撃を受けてしまい、鹿児島を経てマカオに戻ります。

その後、天保九年（一八三八年）に、三人は再びアメリカへ渡っていきました。結局、三人の日本人は帰国の機会を失ってしまいました。

この事件は、当時、幕府がオランダ商館に発行させていた海外情報を知るための資料である『オランダ風説書』に掲載されて多くの人の知ることになり、特に鎖国政策に反対の立場をとる蘭学者たちの批判を受けることになりました。当時、朱子学を正当の学問とする官学の立場から見て、蘭学は異学とも呼ばれて禁止されていたこともあり、開国論を唱えていた渡辺崋山、高野長英、小関三英らの蘭学者は処刑されました。

（芳賀久雄）


★参考文献

・海嶺　三浦綾子

・三浦半島文学めぐり　中里行雄編　三浦文化研究会

・新横須賀市史　横須賀市



発行：浦賀行政センター　編集：浦賀コミュニティセンター分館

〒239-0822 横須賀市浦賀７－２－１　☎ 046-842-4121　休館日 12/29～1/3

# 歴史語らい座・浦賀 四十六

郷土史家 山本 詔一

## ●『近世浦賀畸人伝』X●

―幸保定虎―

名は子どもの時は喜太郎、成人してからは弥兵衛といった。非常に頑固な性格で、お米中心の菜食主義で、一切の肉類を口にしなかった。

十年ばかり前に財産を失った。その時、干鰯問屋に加わったり、東浦賀村の年寄役を勤めたりしていた友人の秋元穐庫（名は三郎左衛門）に、心境を句にして送っている。

その句は「**瓦出て　草に涼しくきりぎりす**」であったが、俳諧を好んでいた穐庫から

「**たることは　草にこそあれ　露の庵**」

と返礼の句が届いた。このやりとりだけをみても単に同情をするだけでなく、どんな境遇になっても壊れることのない深い交流をしていたことが感じられる。またある時、定虎が素麺をつくると友人の時調（前々号の斎藤練之のときにも登場した）を招き、定虎が言うには「朝食を取ろうと思ったら米がなかったので、素麺になってしまったが、これも一人で食べるのは本意でないから、貴方にきてもらった」と述べた。米を買うこともできない状況になっても、なんと度量の大きいことであろうか。この後、江戸へ出てからはすこぶる幸に恵まれ、時々旧友に会えば、戯れの場に付き合い、酒亭にいけば快く酔い、その費用を惜しむようなことはなく、潔いとはこうした振る舞いをいうのであろう。この定虎は江戸の地で没した。『畸人伝』は没年を文政元年（一八一八年）の六月二十四日としているが、東浦賀の法幢寺の墓石には文化十四年（一八一七年）の六月二十四日と刻まれている。

―桐谷随音（意）―

桐谷随音は『浦賀文化』三十八号、「浦賀畸人伝を読む」Ⅱに登場した桐谷道意の跡継ぎであり、『畸人伝』は法名「随音」と刻んでいるが本当は「随意」が正しい。

『畸人伝』には二組の親子が登場するが、その一組目がこの桐谷親子である。

子どもの時の名は庄之助といい、成人してからは八兵衛といった。仕事は櫓造りをしており、その技は極めて巧みであり、浦賀湊に集う船人の誰もが賞賛することを惜しまない。

また、壮健な身体の持ち主で、朝早くから夜は遅くまで仕事に精を出していたので、ついに富を十分に貯えることができた。それは仕事だけでなく、もとより質素であり、あらゆることを倹約することを忘れず、木綿の着物にわら沓という日常生活の慎ましさもあった。しかしながら、旧友や困窮している人には、真っ先に援助の手を差し伸べる姿勢はもっており、まことに恵み深い人と賞賛に値する人物であった。

その生き方は、道理を重んじ、非議を憎んだ。つねに言っていたことは、かって学問をして、三宝（仏・法・僧）を尊敬し、お奉行様を恐れ敬い、年長者を敬うことを学んだ。これを自分の信条とし、簡潔であるだけに貫き通すことの難しさを知るべきであると。

## ～俳句の散歩道～

御林ぬけて古刹に竹の秋
手塚とき子

史の町の青葉若葉に千の風
新田和江

## 笑話一題

私はお茶の心得はないのですが、先日お煎茶をいただく機会があり、20分程でしたが贅沢な時間を過ごしました。

まず驚いたのが道具です。小さな急須と計量スプーン大さじ二分の一程の茶碗は花の絵柄で白くて美しいものでした。そしてお茶の味はとろりと甘くまろやかで香りも豊かでした。

お菓子、2煎3煎といただき味の変化を楽しみました。まさに至福のときでした。

お茶をいただくと、会話がはずみリラックスできて和やかになります。お茶を入れた人の心が伝わります。ここに『もてなし』の心を感じました。

私はよく、急須も使わず沸騰したてのお湯を茶碗に注いで「熱くて飲めない」お茶を出してしまいます。日頃の慌ただしい生活の中でもゆったりとお茶を楽しむ時間を持ちたいと思います。

浦賀コミュニティセンター分館より

## ～ お知らせ ～

当館の事務室内に郷土に関する図書閲覧コーナーを設けています。浦賀にご興味のある方、郷土資料をお探しの方はご遠慮なくお立ち寄りください。

（本の貸し出し、複写はできません）

★おすすめ本★

浦賀奉行史　髙橋恭一著
中島三郎助文書　中島義生編
浦賀・追浜百年の航跡 1897-1997
住友重機械工業株式会社